

文壇資料

鎌倉・逗子

巖谷大四

講談社

267171



日文 701524386

文壇資料

鎌倉・逗子

巖谷大四



講談社

著者略歴

大正4年12月東京に生まれる。

早稲田大学英文科卒。

文芸評論家。

著書に「非常時日本文壇史」(中央公論社)

「戦後・日本文壇史」(朝日新聞社)「文壇紳士録」

(文藝春秋)「波の遺音—巖谷小波伝」(新潮選書)

「物語女流文壇史上・下」(中央公論社)他。

© 1980

DAISHI IWAYA

第1刷 昭和55年10月25日

文壇資料 鎌倉・逗子

定価 1600円

著者 巖谷大四

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112 振替東京 8-3930

電話 東京(945)1111(大代表)

編集 株式会社 第一出版センター

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

0095-286844-2253 (0) (セ)

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお

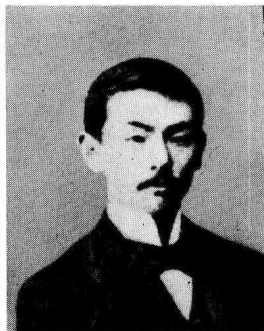
取り替え致します



泉 鏡花



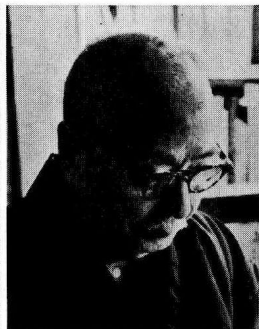
徳富蘆花



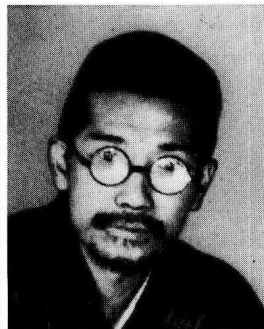
國木田独歩



伊藤野枝



高濱虚子



葛西善蔵



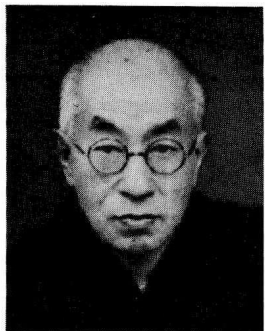
萩原朔太郎



広津和郎



芥川龍之介

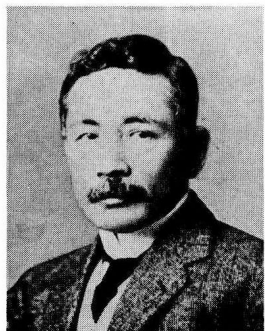


島崎藤村



北村透谷

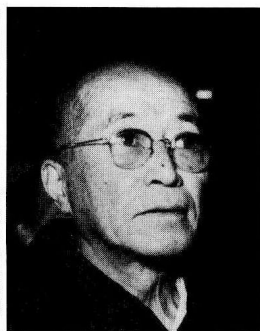
鎌倉逗子
在住人物



夏目漱石



正岡子規



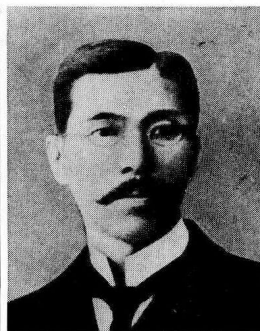
里見 弴



小泉八雲



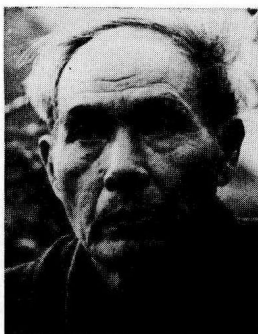
長與善郎



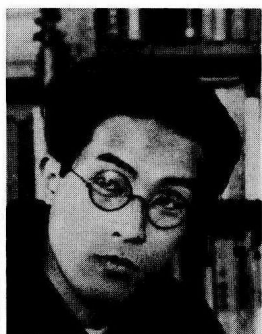
高山樗牛



吉屋信子



中山義秀



島木健作



岡本かの子



大杉 栄



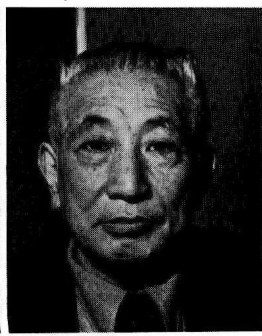
高見 順



横山隆一



林 房雄



小島政二郎



小林 勇



大佛次郎



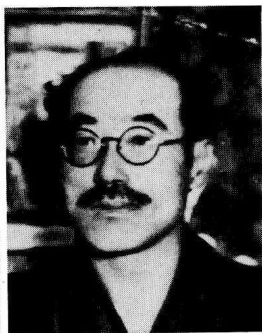
有島武郎



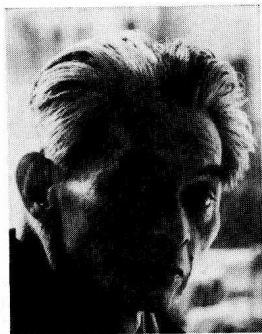
小林秀雄



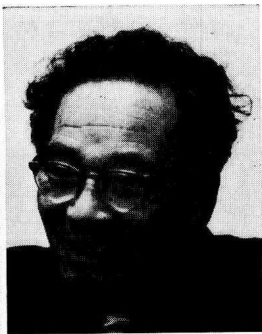
太宰 治



久米正雄



川端康成



永井龍男



中里恒子

はじめに

中世史跡の町鎌倉は、明治に入って都会とくに東京の有産階級の憧憬の町となった。やと、やつと呼ばれる多くの丘陵にかこまれた奥深い谷地を持つ一方、由比ヶ浜、七里ヶ浜、江ノ島といった、海水浴、保養に適した海岸を持つその町は、明治二十一年横須賀線が開通すると共に一層、保養地、避暑地として開かれていった。それは今日ますます観光地としてにぎわっている。

その鎌倉には、明治十年代から多くの作家が、関心を持って訪れるようになり、また、その土地に愛着を持って住みつくようになった。そうした作家たちの、鎌倉（逗子）との関わり合い、文壇史的な意味での、あり方を、一応時代を追って探究してみようとしたのが、著者の意図である。

ただし、『鎌倉文士』という言葉が生れるほど、そこに関わりをもち、また住みついた作家は多いので、最初に鎌倉を訪れたと見られる北村透谷を冒頭に、明治初年から、昭和二十年までに、そこを訪れ、あるいは定住した作家で、文壇史的に意味があると思われる人々を中心に、時代を追って記述し、末尾に、『鎌倉文庫』と『鎌倉アカデミア』という、異色の事項をつけくわえた。いささか、断片的になってしまったが、文壇資料として、いくらかでも、お役に立てば幸いだと思う。

昭和五十五年十月

目次

はじめに	1
北村透谷	9
島崎藤村	15
里見 淳	23
正岡子規	31
夏目漱石	39
高山樗牛	47
長興善郎	55

小泉八雲	61
國木田独歩	65
徳富蘆花	83
泉 鏡花	89
葛西善蔵	107
高濱虚子	117
伊藤野枝	125
芥川龍之介	135
広津和郎	155
萩原朔太郎	165

島木健作	261
川端康成	245
永井龍男	237
中里恒子	231
小林秀雄	223
太宰治	215
久米正雄	201
小林勇	193
大佛次郎	183
有島武郎	171

中山義秀	267
吉屋信子	277
高見順	285
鎌倉文庫	293
鎌倉アカデミア	309
主要参考資料	318
〈折込付図〉鎌倉付近略図	

文壇資料 鎌倉・逗子

装幀 森下年昭

北村透谷

「おなじ古都という名で呼ばれていても、京都や奈良にくらべて、鎌倉は血ぬられたきびしい歴史を持つ。京都は都だった数百年の間に、兵乱を経験したのは、保元、平治と応仁くらいなものだし、奈良は兵火を知らない（大仏炎上は都移りして後のことである）。なのに鎌倉は、鎌倉時代とよばれるわずか百五十年の間に比企の乱、和田の乱、実朝の遭難、新田義貞の鎌倉攻め、そのほか、数えればきりがなほほど酷烈な争乱を刻みこんでいる。

にもかかわらず、鎌倉の風光は、京都、奈良にくらべて、明るすぎるくらい明るい。こちんまりした街の三方からとりかこむ丘陵はなだらかな姿をみせ、五月ともなれば、一度にさまざまな緑を噴きあげる。夏、太陽にきらめく海は、冬もまたおだやかな翡翠いろに凧ないでいる日が多いのだ。

あたたかく、やさしく、静かなこのちっほけな町に、歴史はまたなんと皮肉に、惨たる相克の運命を与えたことか。

いくたびかの戦火を経験したために、鎌倉には、いわゆる鎌倉時代の文化遺産はきわめて少ない。建築物は皆無だし、彫刻なら、有名な長谷の大仏のほか、さして多くは残っていない。頼朝が平泉の中尊寺を模して造ったといわれる二階堂永福寺以外にも、当時の史料には造寺造仏の記録がおびただしく見えるのに、いまはそのほとんどがあとかたもないのだ。酷烈な修羅の歴史がそれらを消し、あとには、おだやかな風光だけが残った。」

これは、現在鎌倉在住（鎌倉山若松）の女流作家永井路子の随筆集『わが町わが旅』（共同通信社）の冒頭の「鎌倉の春秋」の書き出しの文章である。

現在の鎌倉には、たしかに「おだやかな風光だけが」残っているようだ。

その鎌倉からは、不思議なことに、唯一人として作家が誕生していない。そのかわり、この「おだやかな風光」の町鎌倉には、明治の頃から多くの作家が、その風光を楽しむために訪れ、また、その風光の地に居を定めている。

一番最初に鎌倉を訪れた作家は、北村透谷である。

北村透谷（本名門太郎・一八六八〜九四）は、小田原の唐人町の生れだが、明治十四年十二歳の時、一家と共に上京し、京橋弥左エ門町七番地（現在の銀座四丁目、不二屋のあたり）に住んだ。父は大蔵